

## ヘレニズム時代における共同体と儀礼

—栗原・桑山報告によせて—

中尾恭三

はじめに

本報告書での各氏の報告は、宗教的儀礼に関するものであるか、または、儀礼のなかに宗教的要素をふくむものであるかのどちらかであった。儀礼行為を中心として成立していたギリシア人の宗教は、自然宗教ないし広義の民俗宗教ととらえることができる。宗教儀礼をつうじて神との関係を正しく構築していくことが、共同体の秩序維持に貢献し、都市に繁栄をもたらすと信じられていたのである。しかし、儀礼の中で生み出される人間同士の関係も見逃してならない。それら儀礼は常に世俗的な意味をもつものであったからである。

各氏の報告では、都市内部における市民と市民、都市と都市、都市と皇帝をむすびつける機能を儀礼が果たしていたことが論じられている。儀礼とは人的紐帯や社会関係の確立・再確認のためのプロセスであり、また、共有されるべき現実を創出し、再定義していくプロセスであった、と解釈しても差し支えないであろう。

本コメントの目的は、古典期アテナイの和解儀礼をあつかった栗原氏、帝政期アテナイの復興とパンヘレニオンをあつかった桑山氏の報告についてコメントをおこなうことである。同時に古典期と帝政期の間に位置するヘレニズム時代の儀礼についての概略を紹介し、両氏が論じた時代の橋渡しを試みる。

古典期からヘレニズム時代へ

栗原氏の報告では、儀礼がもった公共性を鍵として、和解の儀礼について論じられている。ここでは、罰すること *kolazain* と復讐すること *timorein* が民主政の制度の中にとりこまれていく過程と、前404年のアテナイにおけるアムネスティを中心にして、忘却の儀礼とそれに続く言説とが共同体内部にあらたな秩序を生み出していく姿が描きだされている。

ヘレニズム時代においても、新たな関係を構築していくために人びとはさかんに儀礼をとりおこなっていた。代表的なものはエヴェルジェティズムである。これは主に都市をこえた関係構築のための儀礼である。都市内部においても新たな関係が構築される機会が、さまざまに存在していたことは言うまでもない。ヘレニズム時代の都市内部での新たな関係と地位の創造と

して、特徴的であったのが奴隷解放とそれにとまなう儀礼であった。もちろん奴隷の解放はヘレニズム時代の創造物ではない。ゼルニック・アブラモビッツは、明確に奴隷解放が記録されはじめるのは前5世紀以降としつつも、奴隷解放の慣習自体はアルカイック期以前にさかのぼると指摘している。前4世紀にはいると、アテナイで奴隷が解放される事例が数多くあらわれる。多くの奴隷たちが、所有者による劇場での解放宣言や裁判所での手続きによって身分の転換を経験していたのである。前330年におこなわれたとするアイスキネスの第3弁論『クテシポン弾劾』では、次のように語られている。

すなわち、都市での悲劇上演に際して人びとが伝令をつうじて家内奴隷 *oiketēs* を解放奴隷 *eleutheroi* であると宣言し、すべてのギリシア人をその証人としていた、というのである。この弁論ではさらに、民会決議をとまなわない冠授与とならんで、劇場での奴隷解放を禁止する法にも言及している。これは、アテナイにおいて頻繁に奴隷が解放されていた実態を反映しているであろう。

前3世紀にはいると、ギリシア各地で奴隷解放を記録した碑文が残されるようになる。それには、宗教儀礼をとまなう場合があった。代表的なものがデルポイでの奴隷解放である。ここでは、奴隷の主人がデルポイのアポロンなどの神に奴隷を奉納することで、奴隷は自由人としての身分を獲得していた。

カイロネイアにおいては、主にサラピスにたいする奉納というかたちで、奴隷たちが解放されていた。たとえば、ギリシア碑文集成 *Inscriptiones Graecae* 7 卷 3322 番、前2世紀前半の碑文では次のように記されている。

シミシオスの息子ディオクレスがアルコンの年、ホモロイオスの月15日目、アタニアスの娘デクシッパが、彼女の血のつながった母であるエウプロスの娘デクシッパのもとに、彼女がいきているうちはとどまるという条件で、ピロクセノスの息子サミコスの子供の会いのもと、みずからの奴隷カリスとピュティオス、そしてカリスから生まれたニコンという名の息子を、神聖な人物としてサラピスにささげた。とどまっている間、かれらから生まれた子供は、アタニアスの娘デクシッパの奴隷とならねばならない。彼女は法にしたがい評議会をつうじて奉納をおこなった。

碑文によれば、奉納をつうじた奴隷解放は、評議会の承認を得て、カイロネイアの法にしたがっておこなわれた。そのため解放儀礼は、単に主人と奴隷とのあいだのパーソナルな関係の変化と再定義のみならず、社会的コンテクストをとまなうものであった。解放の条件として、解放後も元主人の家にとどまり、奉仕する義務を負っていたことも、ギリシアにおける奴隷解放の特徴である。奴隷は、解放儀礼によって完全な自由を得たわけではなく、当面の間義務に縛られた半自由な存在として生活せざるを得なかった。

なぜ奴隷たちが神への奉納という儀礼をつうじて自由を得ていたのかの解釈には諸説あり、

ここで詳しく紹介することはしない。しかし、半自由な状態であったにせよ、ひとりの人間が隷属状態から解放され自由人の身分となることは、かれの人生においておおきなステップであったことは間違いであろう。その契機において、儀礼が要求されたことは意義深い。かれの地位が奴隷から解放奴隷へと変化したことは、かれが属した家 *oikos* という狭い範囲のみならず、社会的にも法的にも都市共同体内部でひろく認知される必要があったはずである。解放儀礼が評議会の承認を必要とし、法に則っておこなわれたことは、それを反映している。さらに、解放が都市の聖域でおこなわれ、石版に記録されたことは、このことと関係があるであろう。公共性の高い神殿で擬似的な奉納儀礼をおこない奴隷を解放した理由は、その事実が元主人と元奴隷の間だけではなく、都市共同体のなかのあらたな現実として共有されるべく意図されていたからだと考えられる。

このように古典期・ヘレニズム時代ともに、高次元であれ低次元であれ、社会の重要な契機を定義し確認していくプロセスが、儀礼のかたちで実行されていたのである。

ここでひとつ疑問点を付け加えておきたい。栗原報告では、「思い出さないこと」＝「恨みを訴訟へと発展させないこと」と論じられている。これは復讐することと罰することが私的な活動領域からはなれ、ポリスの法や制度によって制御されている場合に成り立つ議論ではないだろうか。栗原報告が主に検討をくわえた、アテナイでの事例は十分に説得的であるとおもわれる。だが、それをギリシア世界における和解の伝統のなかに位置づけようとするときに、問題が生じてくる。なぜなら栗原報告は、和解の儀礼の実効性を保障する健全な社会構造と法の支配とが、ギリシア人全般に共通した現象であったことを前提として議論しているためである。法の支配と発達した社会制度が実現されていた古典期アテナイでの議論を「ギリシア世界」にまで敷衍させて考えるときには、慎重になる必要がなかっただろうか。

## ヘレニズムからローマへ

つぎに桑山報告へコメントを加える前に、関連するヘレニズム時代と帝政期における儀礼のもうひとつの側面に関して簡単に紹介する。

ヘレニズム時代のもうひとつの特徴として、儀礼の大規模化があげられるであろう。アテナイオス『食卓の賢人たち』5巻にみられる、プトレマイオス2世がアレクサンドリアでもよおした壮麗なディオニュソスの行列は、あまりにも有名である。ヘレニズムの王は、ギリシアの伝統をうけいれる一方で、自己の権力顕示手段としてギリシア人都市では考えられなかったほどの規模で儀礼を挙行していたのである。祝祭に参加し、行列を目の当たりにした都市民には、ヘレニズムの王が帯びた権威と所有した富とが強烈に焼きついたことは想像に難くない。

エヴェルジェティズムを、王と都市、富裕者と都市との間でとりおこなわれたコミュニケーションや儀礼行為としてとらえるならば、もっとも顕著な例としてあげることができる。古典期末のアテナイにおいては、公共奉仕がより少数の富裕市民によって独占されるようになった。この制度がヘレニズム時代に他のギリシア、小アジアの都市に波及していった。ヘレニズム諸

王による都市へのエヴェルジェティズムはこの流れと平行した現象である。それは、ギリシア人がそれまで想像できなかった規模でおこなわれ、王と都市との儀礼として成立していた。たとえば、前299年セレウコス朝アンティオコス1世の長男が、ミレトス近郊ディデュマの聖域に200メートルものストアを建造している。前2世紀のセレウコス朝からミレトスへのある贈与は、16万メディムノスの穀物と130－260タラントに相当する木材といったものであった。<sup>(1)</sup>他方で都市は、王たちにたいする儀礼・祝祭を創設することで、その恩恵に応えました。儀礼行為がさらなる儀礼をうみだし、都市と王との関係を深める効果をもたらしていたのである。

ローマ帝政期における、小アジアの都市儀礼は異なる地位に属する人びとを結びつける機能を持ち続けていました。バーバラ・レヴィック氏は、小アジアの都市でおこなわれていた祝祭と行列が、イタリアからの移住者、ギリシア人、土着住民といったアイデンティティを異にする人びとを結び付けていたと指摘している。帝政期小アジアのプリュギア地方で繁栄した2つの都市アイザニとアンティオキアでは、古くからの伝統的な儀礼が都市の祭儀として存続し、それらが都市内部でアイデンティティを別にする人びとを統合する目的を視覚的に表現する手段として成り立っていたのである。<sup>(2)</sup>

さらにアンティオキアでは、メン・アスカエノスの聖域へとむかう行列が都市内部の帝国祭儀と結合されていた。メン祭儀に付随する行列と平行して、アウグストゥス神殿へとむかう行列も都市民によって挙行されていたのである。そこではローマ様式の儀礼がおこなわれ、剣闘士競技までもが開催されていた。都市が宗教的儀礼によって、皇帝とのあいだの関係を構築しようと模索していた様子が垣間見られるのである。

紀元後2世紀のハドリアヌス帝のアテナイ改造とパンヘレニオンによる皇帝儀礼をあつかった桑山氏の報告では、ローマ皇帝とギリシア人が儀礼によって、ローマ帝国の現在をギリシア的過去に結び付けようとしていたことを、論じられた。皇帝と都市という現在を祝祭によって描写し、再確認していく契機として儀礼が位置づけられていたのではないかと。

桑山報告にかんして、疑問点を挙げるとすればパンヘレニオンとは何であったかである。報告ではパンヘレニオンの内部構造やかれらが挙行していたパンヘレニア祭への言及がおこなわれていた。しかし、そのパンヘレニオンを構成した人々の顔が見えないことには、儀礼のもつ相補性を十分理解することはできないのではないだろうか。アッティクスとヘロデス親子以外で、パンヘレニオンに参加した諸都市の富裕者層とはいかなる人びとで、どのような家系に属していたのか、彼らにとって儀礼に参加した意味はなんであったのか。困難な史料状況であるが、この点について踏み込んだ議論がなされなければ、パンヘレニオンとパンヘレニア祭の位置づけはあいまいなままとならざるを得ないように感じる。

(1) OGIS 213; K. Bringman and H. van Steuben, *Schenkungen hellenistischer Herrscher an griechische Städte und Heiligtümer*, Teil 1: *Zeugnisse und Kommentare*, Berlin, 1995, pp. 338-41, no. 281, 284.

(2) バーバラ・レヴィック著、拙訳「ローマ時代の2つのプリュギア共同体 ー対比と補完ー」『パブリック・ヒストリー』第5号、2008年、14-33頁。

栗原氏、桑山氏、山内氏の報告では、古代社会において儀礼が社会的コンセンサスをうみだし、維持していくためのツールであったことが明らかとされている。儀礼を通じて古代地中海世界に生きた人びとは、共通の記憶を維持・確認し、ネットワークを形成していった。古典期、ヘレニズム時代、ローマ帝政期と数世紀もの時代の移り変わりはあったものの、儀礼がもった社会的意味は共通していたといっただよいであろう。